様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18320070
研究課題名（和文）　中国寧夏における回族語に関する基礎的研究

研究課題名（英文）　Field research on education and Language of the Isramic tribe Ningxia in China

研究代表者
張　筱平（Zhang Xiaoping）
愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授
研究者番号：90424910

研究成果の概要：
本研究課題は、中国、とくに寧夏回族自治区と北京、天津地区に居住する回族の言語である現代回族語を調査の対象とし、３年間の期間中にアンケート調査とインタビュー調査を中心とした現地調査と資料収集を行い、それらによって得られたデータに基づいた研究活動を行ってきた。そして、以下に紹介する通り一定程度の研究成果を公表するに至った。

まず《**中国宁夏回族话研究实地考察**》の（１）～（５）は、それぞれ実地調査で得られた結果をもとに回族語の現状を分析したものである。（１）は第１回現地調査の成果を踏まえて、現在の寧夏のイスラム族に関する諸問題について考察したものであり、（２）は寧夏自治区の各都市の街頭、各村落の非常に濃厚な言語文化の息吹の源泉について考察したものである。（３）は寧夏自治区における民族（イスラム教関連）教育機関の民族の特色を生かした教育が、寧夏における回族語伝承の重要なツールの１つであることと、今後の発展の可能性について考察したものである。さらに、（４）は中国の研究者によるイスラム語に関する従来の定説と、我々が本研究課題の現地調査等から得た見方の違いを論じたものであり、（５）は寧夏自治区内のイスラム族に実施した言語・文化に関するアンケート調査の結果の統計から、言語生活と常用語の問題について考察したものである。また、現地協力者２名の協力を得て、イスラム族自身或は現地在住の漢族の視点からの考察を試みた。同２名の論考は現地の回族・漢族自身による現状とメッカ巡礼に関する問題を考察したものである。

この他に、現地における回族に対するアンケート調査（1528 名）結果の統計とその分析、イスラム教関係者と回族住民に対するインタビュー調査の録音資料を活字化したものとその解説、回族常用語のうち代表的なものについて解説した常用語彙解説集２篇、イスラム族の言語・文化・歴史等に関係する図書資料の目録、現地調査の際に撮影した記録画像集を関連資料としてまとめた。各成果の詳細については次頁以降の「研究成果」の項を参照されたい。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
２００７年度	2,300,000	690,000	2,990,000
２００８年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総　計	9,100,000	2,730,000	11,830,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：中国語学

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

１．研究開始当初の背景

寧夏（寧夏回族自治区）は中国における少数民族の一つである回族の人口が最も多い地区である。回族とはイスラム教を信仰する民族で、中国の学術界では、この民族の形成は、唐宋時期にペルシア、アラビア方面から交易目的で来華したムスリム商人と関係があり、また、中国国内におけるこの特殊な一群が使用している言語は中国語ではない、ある特殊な言語であると理解されている。

元代になると、イスラム教を信仰するペルシア、アラビア及び中央アジアの諸民族が大挙して中国に入り、回族が本格的に形成されたが、この時期に彼らの言語にも非常に著しい変化が発生した。民族内部では依然としてペルシア語、アラビア語を使用したものの、他民族、とくに漢族との接触が不可欠である政治、経済、文化等の社会生活の場面においては、これと同時に中国語も使用するようになったのである。

さらに、明代後期から清代にかけて、漢民族の文化に包囲された社会的環境という要因によって、回族それ自身の固有の言語はしだいに萎縮・衰退し、彼らは最終的には自らの生存とコミュニケーションに最も適した言語である中国語を受け入れた。

しかし、また一つの民族として、回族は彼ら自身の言語を完全には放棄せず、彼らの信仰心に深く関わる宗教生活や日常生活で使用する言語の中には、依然として彼ら自身、つまり民族内部だけにしか通じない言語が残されている。中国語を基盤として回族固有の様々な要素が加わった言語がいわゆる回族語である。

また、これまでの中国における回族語に関する研究は、いずれも歴史的な角度からの研究が中心で、共時的な研究成果は非常に少なかったと言える。とくに寧夏地区における現在の回族語については、第一次資料を利用した研究は本研究課題以前にはほぼないに等しいのが現状である。

２．研究の目的

本研究課題は、中国の寧夏回族自治区と北京、天津地区に居住する回族の言語である回族語を研究対象とするものである。その中でもとくに中国で唯一の回族自治区である寧夏の現代回族語を調査の主な対象として、以下に挙げる諸点について調査・考察することを主な目的とした。

（１）中国の寧夏自治区の現代回族語の現状について

現代回族語の常用語彙、流行語彙、ならびにその書面語での形式、北京・天津地区の回族語との差異、文法的特徴、タブーなど

（２）寧夏現代回族語の伝承について

回族語の伝承の手段とその方法、また、伝承に対して回族の家庭・イスラム寺院・学校教育などの機関が果たす役割、回族内部のコミュニケーションの機能など

（３）寧夏の現代回族語の存在と伝承の社会的要因について

中国国内、寧夏自治区の地区内の政治、経済の諸制度や文化的側面、イスラム国家からもたらされる文化

以上の諸問題について、現地調査、音声・画像及び活字資料の収集から作成する基礎資料データベース、回族語常用語彙索引、音声資料等を通して考察し、現代回族語の特徴の一端を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

以下の７項目に沿って研究を遂行した。

（１）中国の回族の言語・文化・歴史関係図

書資料の調査と収集
各現地調査の日程、内容等の詳細については、年度報告に記載した通りである。
（２）寧夏自治区内の各地、北京・天津の回族居住区における現地調査
特に回族語の常用語については、寧夏社会科学院の協力を得て、寧夏自治区、北京市、天津市に居住する回族（1528 名）へのアンケート調査と、イスラム教指導者や回族住民へのインタビュー調査を実施した。また、インタビュー調査に並行して、同調査を録音し音声資料として収集し、これを活字化した。
　この他、回族語の伝承に関わる社会的要素、即ちイスラム寺院、回族幼稚園、回族学校、回族の一般住民の家庭に対する実地調査を実施した。
（３）現地調査（アンケート調査、インタビュー調査）によって収集した文字資料と音声資料の整理とデータベース化
（４）現地調査報告の作成
（５）アンケート調査の記述回答の結果を主たる材料とする寧夏回族常用語彙一覧の作成
（６）現地で録音収集した音声資料をまとめたＣＤ版回族語常用語彙録音集の作成
（７）回族の言語伝承の諸問題に関する考察

　本研究課題全体の総括と回族語全般については張筱平が担当し、その他のデータ処理、文法・語彙関係については、荒川清秀、塩山正純がそれぞれ分担した。

４．研究成果
　前頁の研究目的の項でも触れた通り、中国における現代回族語に関する研究は、目下、共時的な研究成果は非常に少なく、とくに寧夏地区の回族語については、アンケート調査や音声録音資料などの第一次資料を利用した研究はないに等しかった。
　本研究課題では、寧夏における回族語を中心に、中国における回族語の文字、音声資料の収集と、その整理・研究に着手した。本研究課題の一連の研究成果は、回族の現状に対する認識を新たにすることと、同分野の今後の研究に第一次資料を提供という実用面で、少なからず貢献できるのではないかと考える。研究協力者によるものを含む本研究の具体的な研究成果は以下の通りであり、いずれも本研究項目の最終報告書に附するＣＤ-ROM に収録しているものである。

＜論文＞
（１）《アッ･サラーム･アライクム–中国宁夏回族话研究实地考察（一)》
本研究課題の第１次現地調査の成果をもとに、（１）寧夏社会科学院による本研究課題への協力体制の構築、（２）寧夏回族語の現況と文化背景に関する調査、（３）書面語形式の基礎調査、（４）イスラム寺院がはたす役割の概略調査、（５）阿訇の役割の概略調査、（６）家庭と教育の概略の把握などの諸点と、今後の見通しについて詳細に報告したものである。
（２）《街头感受民族语言文化–中国宁夏回族话研究实地考察（二)》
３度の現地調査で寧夏自治区の各都市の街頭、各村落を訪問した際に体感したところの、経済的発展を遂げた東部沿海地区ではすでに感じることが難しくなった非常に濃厚な言語文化の息吹の源泉について、調査結果をもとに考察したものである。
（３）《“伊玛尼不能丢”–中国宁夏回族教育暨回族语言研究实地考察》
寧夏自治区の社会における民族（イスラム教関連）教育機関に関する調査と分析を通して、寧夏における回族語の存在と伝承が、これと密接な関係があり、これを東部沿海地区の回族の現状と比較した場合、際立った特徴があ

ることを指摘した。また、かような機関における民族の特色を生かした教育がすでに寧夏における回族語伝承の重要なツールの１つとなっており、今後益々発展していく可能性があることを指摘したものである。

（４）《中国当代学者视野中的回族语言问题与我们的看法–关于宁夏回族语言问题的考察（一)》

中国の研究者によるイスラム語に関する従来の定説と、我々が本研究課題の現地調査等から得た見方の違いを論じたものである。

（５）《宁夏回族语言问卷调查简析–关于宁夏回族语言问题的考察（二)》

寧夏社会科学院の協力を得て、寧夏自治区内のイスラム族を対象に実施した言語・文化に関するアンケート調査の結果の統計をもとに、言語生活と常用語の問題について考察したものである。

（６）《关于回族常用语和清真寺的教学问题》

回族語の常用語とイスラム寺院における教学問題について、イスラム教指導者としての視点から考察したものである。

（７）《宁夏回族语言与民俗、朝觐的问题》

寧夏自治区における回族の言語、民俗、習慣、メッカ巡礼に関する様々な問題について、地元民の視点から考察したものである。

＜資料＞

（１）调查表及统计

寧夏社会科学院の協力を得て、寧夏自治区内のイスラム族を対象に実施した言語・文化に関するアンケート調査（１５２８名分を回収）の結果の数字をもとに統計をとったものである。

（２）部分录音资料文字精要

現地調査で行ったインタビュー調査の録音資料のうち特に重要と思われるものを活字におこしたものである。

（３）回族常用词语注释（一）

上記（１）のアンケート調査の設問 13「请您用汉字写出１０个最熟悉的回族常用词语」に対する回答として記述された語彙など、回族住民が日常生活で常用している語彙の意味について解説を試みたものである。

（４）回族常用词语注释（二）

上記（３）の続編であり、同じくアンケート調査の設問 13「请您用汉字写出１０个最熟悉的回族常用词语」に対する回答として記述された語彙など、回族住民が日常生活で常用している語彙の意味について解説を試みたものである。

（５）相关图书资料目录

主として現地調査の際に収集したイスラム族の言語、文化、歴史、経済等の分野に関連する図書資料全 421 点の一覧である。

（６）图片精选

現地調査の際にイスラム寺院、イスラム廟、イスラム寺院付属の教育施設、イスラム族の学校、一般家庭、街頭、研究機関などで数百枚撮影した写真資料のうち、重要だと思われる数十点を採録したものである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 ５ 件）

① 張筱平

2008、《街头感受民族语言文化—中国宁夏回族话研究实地考察（二）》、『文明２１』20 号 101ー128 頁、2008 年、国際コミュニケーション学会、査読無

② 張筱平

《アッ･サラーム･アライクム**—中国宁夏回族话研究实地考察(一)》**、『文明２１』18 号、21ー38 頁、2007 年、国際コミュニケーション学会、査読無

以下は掲載予定の論文（掲載決定）

③ 張筱平・荒川清秀・塩山正純

《中国当代学者视野中的回族语言问题与我们的看法—关于宁夏回族语言问题的考察（一）》、『文明２１』23 号（2009 年９月予定）、国際コミュニケーション学会、査読無

④ 張筱平・荒川清秀・塩山正純
《伊玛尼不能丢”—中国宁夏回族教育暨回族语言研究实地考察》、『言語と文化』22 号（2010 年１月予定）、愛知大学語学教育研究室、査読無

⑤ 張筱平・荒川清秀・塩山正純
《宁夏回族语言问卷调查简析—关于宁夏回族语言问题的考察（二）》、『文明２１』24 号（2010 年３月予定）、国際コミュニケーション学会、査読無

〔学会発表〕（計 0 件）
本研究課題に関しては特に国内外の学会で発表は行わなかった。但し、以下の通り公開研究会を開催した。

愛知大学国際ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ学会主催：
「中国の回族言語文化」に関する研究会
内容：本研究の研究協力者による研究報告と公開討論会
楊万宝：「関於中国回族常用語與清真寺的教学問題」
李学忠：「関於回族語言和民俗以及朝覲問題」

〔図書〕（計 0 件）
該当なし

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

６．研究組織
（１）研究代表者
張　筱平（Zhang Xiaoping）
愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授
研究者番号：90424910

（２）研究分担者
荒川清秀
愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授
研究者番号：00167230

塩山正純
愛知大学・国際コミュニケーション学部・教授
研究者番号：10329592

（３）連携研究者
【現地研究協力者】
楊万宝（寧夏青銅峡市イスラム協会）
李学忠（寧夏社会科学院）
丁克家（寧夏社会科学院）